

P1-024

手指先の協調運動の苦手さ（不器用）に関する実態と心理的ストレスに関する研究

橋本 創一¹⁾、町田 唯香²⁾、田口 禎子³⁾、秋山 千枝子⁴⁾

東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター¹⁾、
東京学芸大学大学院 教育学研究科²⁾、
駒沢女子短期大学 保育科³⁾、
あきやまこどもクリニック⁴⁾

【目的】 児童期から青年期における不器用（手指先の協調運動の苦手さ）に関する実態、鉛筆・箸の握り方・持ち方、その形態と機能性、不器用さへの心理的ストレスについて明らかにする。

【対象/方法】 大学1年生524名に質問紙調査を行い、協力が得られた463名を分析対象とした(回収率88.4%)。内訳は、A文系大学(教育)247名、B理系大学(工学)86名、C体育系大学(スポーツ)130名である。調査内容は、(1)手指先の協調運動の苦手さ、(2)児童・青年期を振り返っての不器用さに関する思い、(3)鉛筆・箸の握り方・持ち方、(4)不器用さの形態と機能性について、(5)不器用さに関する心理的ストレス、などである。研究協力者には研究主旨の説明と了承を得た上でデータを匿名化し個人情報に配慮した(東京学芸大学研究倫理委員会承認[152])。

【結果/考察】 手指先の協調運動に関する3件法の回答は、全体で、得意60%、普通24%、不得意15%であった。大学別にみると、不得意がA文系大12%、B理系大27%、C体育系12%であり、理系大の苦手な者が有意に多かった($\chi^2=13.54, f=4, p.01$)。手先と全身の協調運動に関する5件法(1:とても得意~5:とても苦手)において、手先と全身ともに苦手さが4と5(少し+とても苦手)と回答した者は39名(15%)であり、手先と全身の協調運動の優劣には正の相関がみられた($r=.63, n=452$)。小学校、中学校、高校、大学(現在)について9種類の手先を使う動作(箸、靴紐、ハサミ、トランプなど)について質問すると、苦手の平均回答率が小学校26.0%、中学11.4%、高校7.3%、大学6.8%であり、加齢とともに減少していた。特に、現在までずっと苦手と回答された「トランプをきる16%」「小さい罫マスに文字を書く7.5%」「紙を切る6.6%」などが顕著に多かった。自身の不器用に関する心理的ストレスへについて、ネガティブな回答として「上手くできず不便」「できるようにになりたい」「マイナスな気持ちになる」があり、逆にポジティブな回答には「気にしていない」「困っていない」「仕方ない」「何も思わない」などがあった。不器用について他者から指摘された有無について、「言われたことがない70%」「言われたことがある30%」であり、その中で「言われたが気にしない16%」「言われて気にした13%」「言われたことはないが気にする3%」であった。

P1-025

療育支援を受けている子どもを育てる保護者から見たペアレント・トレーニング受講後の指摘

鯉坂 誠之¹⁾、米地 悦子²⁾、池田 友美³⁾、石崎 優子⁴⁾、中村 恵⁵⁾、小田原 英義¹⁾、福地 成⁶⁾、岩坂 英巳⁷⁾、古川 恵美⁸⁾

大阪府立大学 高専¹⁾、大阪府 茨木市 保育士²⁾、
摂南大学³⁾、関西医科大学⁴⁾、
畿央大学⁵⁾、みやぎ心のケアセンター⁶⁾、
ハートランドしぎさん⁷⁾、関西福祉大学⁸⁾

【目的】 本研究は、児童発達支援センターで療育支援を受けている子どもを育てる保護者を対象としたペアレント・トレーニング(以下、PT)の受講後に実施される質問紙調査に基づく指摘(自由記述)の具体的な内容を明らかにすることを目的とする。

【方法】 本研究では、2018年10月から2019年3月までにPTを6回開催し、その受講後に質問紙調査を実施した。調査対象は、A県B市立C児童発達支援センター(福祉型)に週5日通所する子どもの保護者9名である。調査ではPTで1.学んだこと、2.変化の内容、3. PT中の課題、4. 宿題の課題、5. その他、の各質問に対して自由記述で回答を求めた。分析では軽量テキストマイニングソフト(KH Coder3:樋口耕一, 2018)を使用して共起ネットワーク分析を行った。これにより指摘された全文章の中から、高頻度で出現する語の相互の関連を明らかにできるとともに、「語-語」間の共起関係に着目して指摘内容の意味解釈が可能になる。

【倫理的配慮】 調査に先立ち、対象者本人へ口頭及び文書にて調査概要を説明し、同意書にて研究協力への同意を得た。畿央大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:H30-14)。

【結果】 指摘された総抽出語数は1578語であった。最頻出語は上位から「子ども」「思う」「行動」「難しい」「自分」といった語が列挙された。続いて共起ネットワーク分析を行った結果、指摘された内容は、その他を除く10分類に集約された。とくに全10分類の中で中心的な役割を果たしている語に着目すると「余裕」が抽出され、この語は「時間」「自分」「変える」との関連が強いことが明らかとなった。その内容は、例えば分類1『自分の気持ち(心)や時間に余裕がないときには、頭では分かっているが実践できず毎日悩んでいたが、冷静になったとき改善策を考えられるようになった。また視点を変えることで、結果だけを見るのではなく子どもの特性を前提にCCQを意識してほめるようになった。』のように示された。

【考察】 児童発達支援センターで療育支援を受けている子どもを育てる保護者にとって、子どもへ達成しやすい指示や落ち着いた伝え方を行うためには、気持ちや時間に「余裕」を生み出すことが重要である。また、そのような「余裕」が持てない場合には視点を「変える」ことが必要であり、改善策を考える手掛かりとなりうるということが明らかとなった。*本研究はJSPS科研費18H01001の助成を受けた。